

第18回サントリー音楽賞
内田光子・若杉弘の両氏に決定

第18回（昭和61年度）サントリー音楽賞が内田光子（ピアノ）・若杉弘（指揮）の両氏に贈られることが3月4日、東京・赤坂のサントリーホール小ホールで行なわれた最終選考会で決定しました。同賞は、前年度においてわが国の洋楽の発展向上に最も寄与した日本人を顕彰するもので、受賞者には本年より賞金500万円（これまでは300万円）が贈呈されます。

両氏の受賞理由はそれぞれ以下の通りです。

内田光子氏のモーツァルトの解釈と演奏に関する著しい進境は、数年前から内外の注目を集めています。たとえば、第14回（昭和57年度）サントリー音楽賞のノミニ、「モーツァルト／ピアノ・ソナタ全集」や「モーツァルト／ピアノ協奏曲全集」の録音（フィリップス社）など大きな成果をあげてきました。そして、それらを踏まえてサントリーホールで行なわれた「モーツァルト・ピアノ協奏曲全曲演奏会」（11／4・7・14・16）はヨーロッパ音楽の原点のひとつと言うべきモーツァルトを対象に、ウィーンで身につけた様式感覚を生かしつつ、そこに独自の美意識を盛りこみ、デリケートで大胆な表現でモーツァルト演奏に新しい可能性を示しました。そして鮮烈なモーツァルト像を生みだしました。このような業績は内田光子氏のすぐれた資質を余すところなく明らかにしたものであり、当然モーツァルト以外の分野でも今後いっそう充実した活動が期待できるだろうというものです。

また、若杉弘氏は、ドレスデン国立歌劇場常任指揮者、チューリヒ・トーンハレ協会芸術総監督としての国際的活躍に加えて、'86年は日本での活動が目覚ましく充実していました。東京都響音楽監督として、同オーケストラによる「トゥーランガリラ交響曲」（メシアン）、「交響的前奏曲」（日本初演）、「少年の魔法の角笛」および「千人の交響曲」（いずれもマーラー）、NHK交響楽団への客演による「第6交響曲」（マーラー）と歌劇「ペレアスとメリザンド」（ドビュッシー・演奏会形式）、二期会公演の「ワルキューレ」（ワーグナー）等、大曲、難曲の数々を非常に卓越した設得力の大きい名演奏を行なって、わが国の楽壇に多大の貢献をしたことによるものです。

演奏家2人の受賞は今回が初めてですが、選考委員の宮沢縦一氏は、記者発表の席上で、「内田氏のモーツァルト演奏、若杉氏の後期ロマン派の演奏ともに非常にすぐれており、最後の最後まで意見が分かれ2人の受賞になりました」と述べていました。

内田氏は、ちょうどサントリーホールでの演奏会当日だったため、ゲネプロの合間に受

賞を聞き、「まさかとは思っていましたが、とても嬉しい。さっそく控室でシャンパンで乾杯します」と喜びを語っていました。また、現在チューリッヒに滞在中の若杉氏からは、「昨年の私の仕事が皆さんに認められ、権威ある賞をいただき、嬉しいかぎりです」とのコメントが届きました。

以 上